

瀬戸内海の藻場の現状と水産業

堀 正和

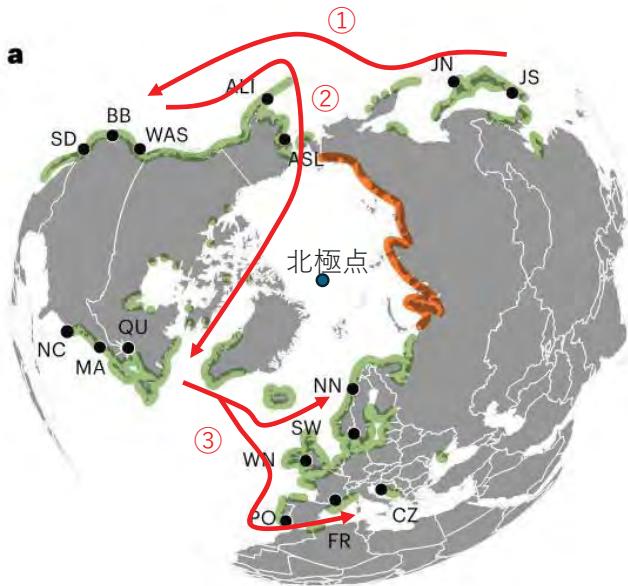
国立研究開発法人水産研究・教育機構



Contents

1. 瀬戸内海のアマモ場の変化
2. CO₂吸収源と水産業を両立させるアマモ場
3. アマモ場再生と今後の展開

アマモ場 (*Zostera marina*) の分布



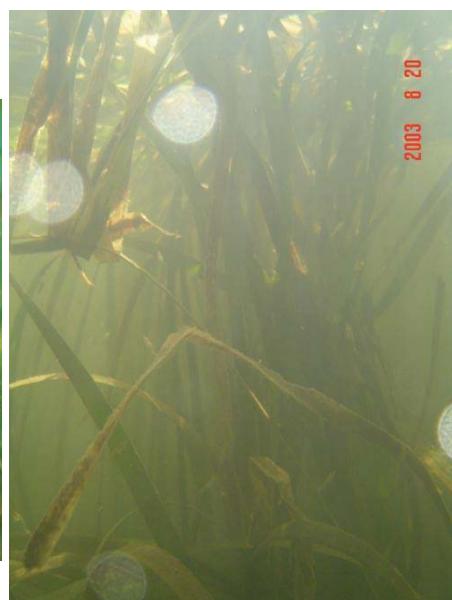
Yu et al. (2023)を改変

アマモの形態可塑性



矮小型の栄養株
(葉長 ~40cm)

瀬戸内海西部



大型の栄養株 (葉長 ~3m)

北海道東部

アマモの遺伝的形質

同じ水槽内で同じ条件で種から育てた場合



瀬戸内海西部産

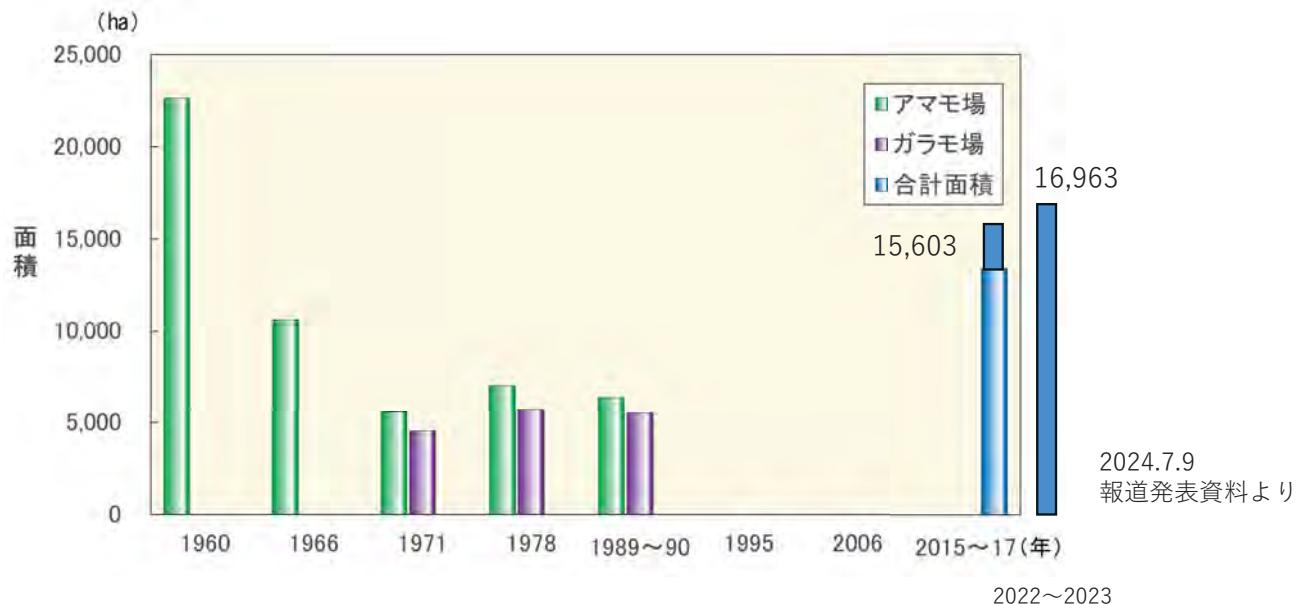
鹿児島産（分布南限）

アマモの寿命

		平均年齢（年）	最大（年）
HYDROCHARITACE	(トチカガミ科)		
<i>Enhalus acoroides</i>	ウミショウブ	3 - 4	9 - 10
<i>Thalassia hemprichii</i>	リュウキュウスガモ	3 - 4	6 - 7
<i>Halophila decipiens</i>	ヒメウミヒルモ		
<i>Halophila ovalis</i>	ウミヒルモ	0.1	0.3
CYMOPOCEACEAE (ベニアマモ科)			
<i>Cymodocea rotundata</i>	ベニアマモ	1.5	4 - 4.5
<i>Cymodocea serrulata</i>	リュウキュウアマモ	1.0	1.7-2.0
<i>Halodule pinifolia</i>	ウミジグサ		
<i>Halodule uninervis</i>	マツバウミジグサ	0.7-1.0	1.5-7.0
<i>Syringodium isoetifolium</i>	ボウアマモ	1.2	1.5-2.0
ZOSTERACEAE (アマモ科)			
<i>Phyllospadix iwatensis</i>	スガモ		
<i>Phyllospadix japonicus</i>	エビアマモ		
<i>Zostera asiatica</i>	オオアマモ		
<i>Zostera caespitosa</i>	スゲアマモ		
<i>Zostera caulescens</i>	タチアマモ		
<i>Zostera japonica</i>	コアマモ		
<i>Zostera marina</i>	アマモ	1~100	>1800

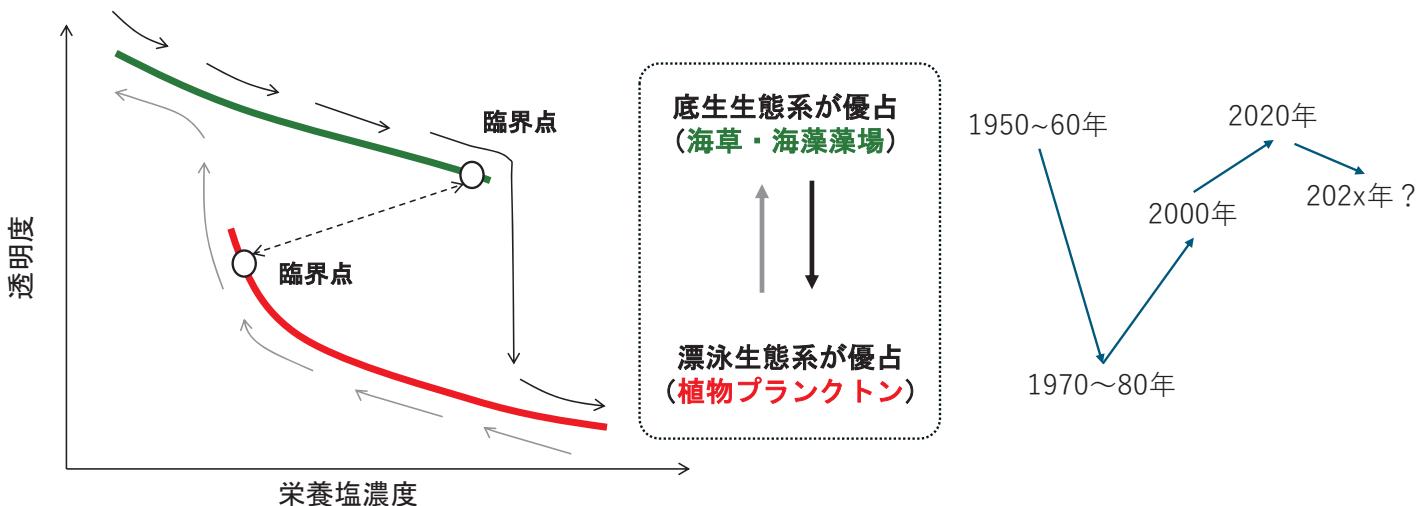
Hemminga and Duarte (2000)を改変

瀬戸内海の藻場・アマモ場の変遷

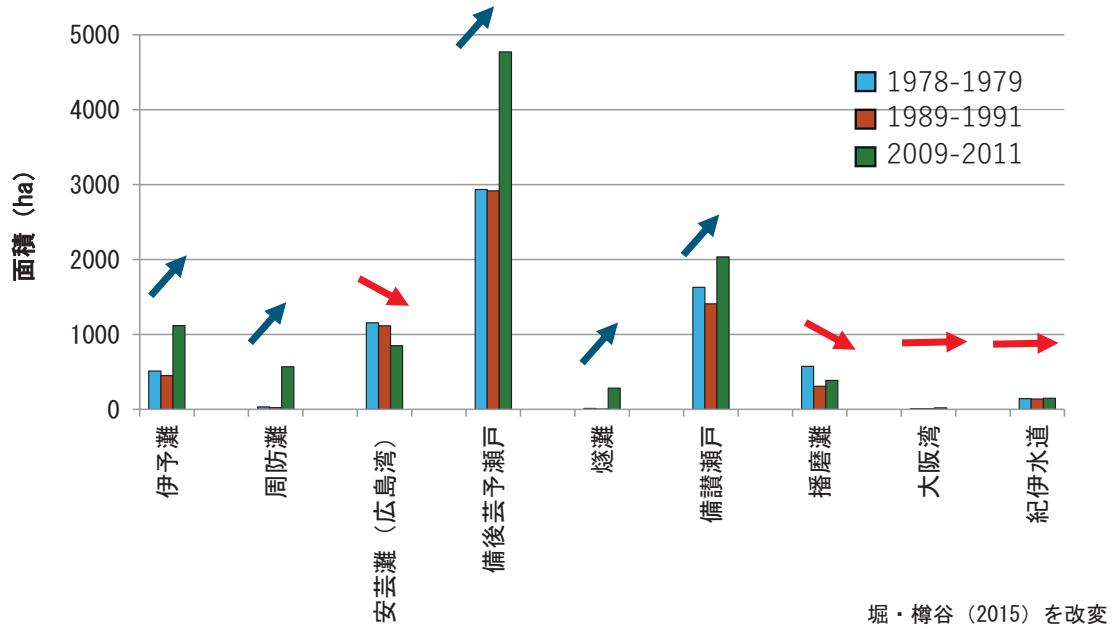


せとうちネット (https://www.env.go.jp/water/heisa/heisa_net/setouchiNet/seto/g2/g2cat01/mobahigata/index.html) を改変

アマモ場の分布増減を制限する要因



瀬戸内海のアマモ場の変遷



瀬戸内海のアマモ場の変遷

III. 調査結果 » 1. 藻場 » ①面積の経年変化

- ◆令和4及び5年度の瀬戸内海全域における藻場面積は、平成27～29年度と比べて約9%増加した。
- ◆瀬戸内海の瀬戸内海の東側と西側で異なる傾向がみられ、紀伊水道、大阪湾、播磨灘、備讃瀬戸等では、概ね藻場面積が増加した一方で、広島湾、響灘、周防灘、豊後水道等では、藻場面積は減少した。
- ◆この結果は、別途実施したヒアリング結果（東側では、透明度の上昇によるアマモ場の拡大。西側では、植食性魚類の食害や水温上昇により藻場の分布水深の変化等）と符合したが、様々な要因により藻場面積は変動するため、詳細な理由は不明である。

湾	平成27～29 年度 藻場面積(ha) (A)	令和4,5 年度 藻場面積(ha) (B)	経年変化 H27～29→R4,5 (B/A)		
				(A)	(B)
① 紀伊水道	800	1,347	168.4		
② 大阪湾	335	470	140.3		
③ 播磨灘	1,395	3,083	221.0		
④ 備讃瀬戸	1,435	1,931	134.6		
⑤ 備後灘	470	397	84.5		
⑥ 韶灘	3,251	2,745	84.4		
⑦ 安芸灘	449	442	98.4		
⑧ 広島湾	668	593	88.8		
⑨ 伊予灘	1,434	1,833	127.8		
⑩ 韶灘	2,218	2,085	94.0		
⑪ 周防灘	1,925	1,143	59.4		
⑫ 豊後水道	1,224	896	73.2		
合計	15,604	16,963	108.7		

※小数点以下を四捨五入しているため、合計値が合致しない場合がある

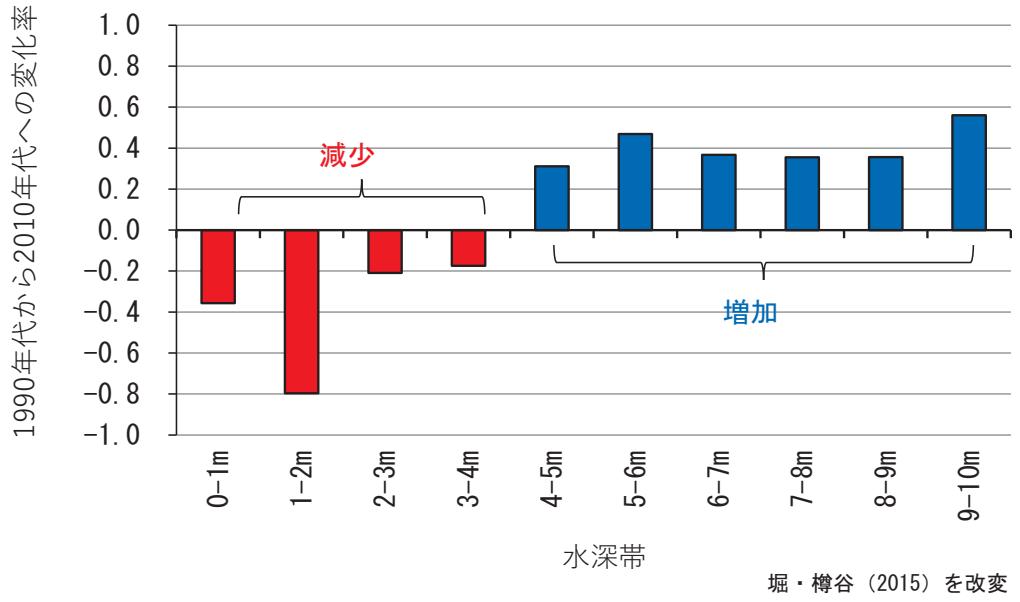


↑ 増加
↓ 減少

増加が東へ移行

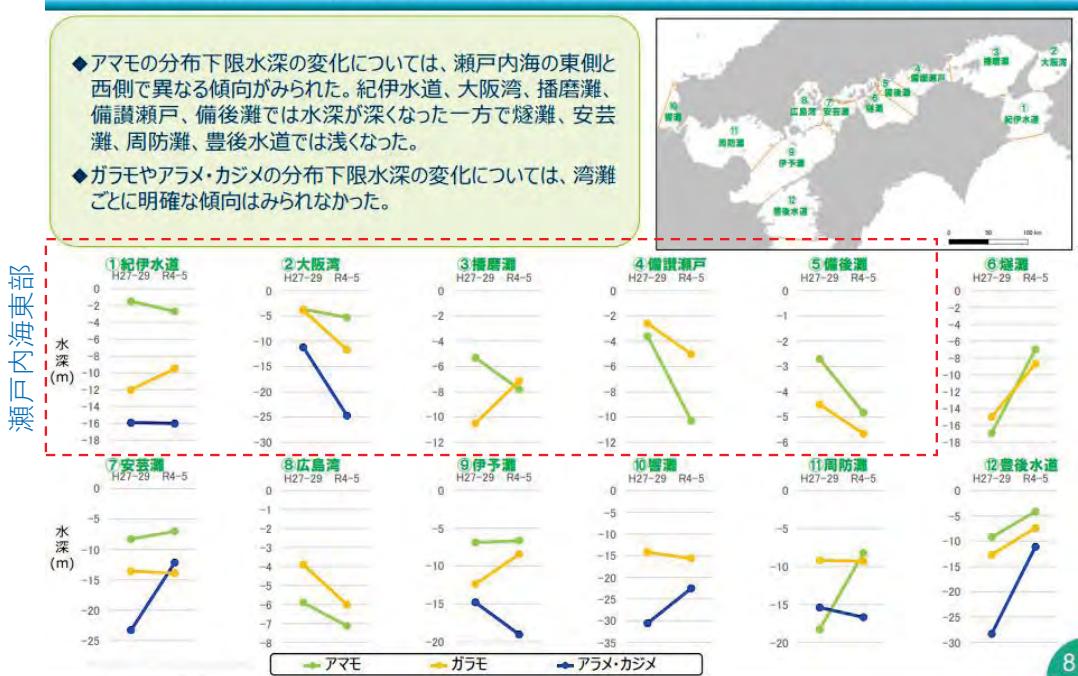
環境省HPより抜粋 (<https://www.env.go.jp/content/000237001.pdf>)

瀬戸内海のアマモ場の変遷の特徴：水深



アマモ場の分布下限

III. 調査結果 » 1. 藻場 » ②分布図 » 分布下限水深の変化

Ministry of
the Environment

透明度が悪くなれば、増加しなくなる

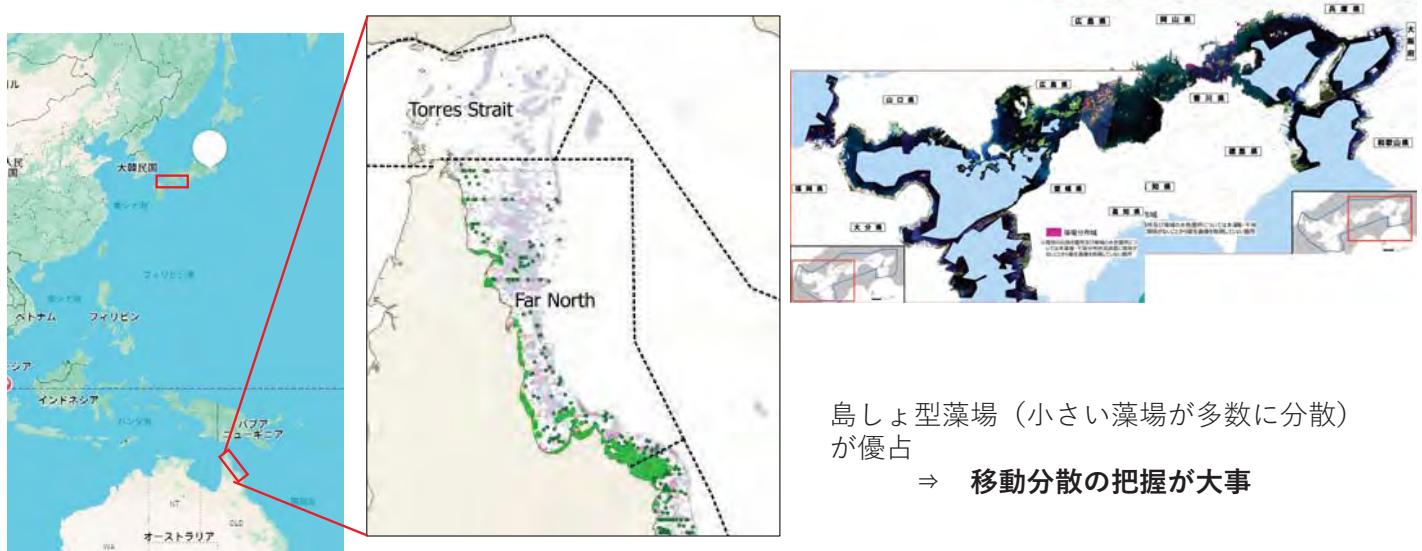
環境省HPより抜粋 (<https://www.env.go.jp/content/000237001.pdf>)

瀬戸内海のアマモ場の変遷の特徴：群落の空間スケール



環境省HPより抜粋 (<https://www.env.go.jp/content/000237001.pdf>)

瀬戸内海のアマモ場の変遷の特徴：群落の空間スケール



瀬戸内海のアマモ場の変遷の特徴：アマモの生活史の転換

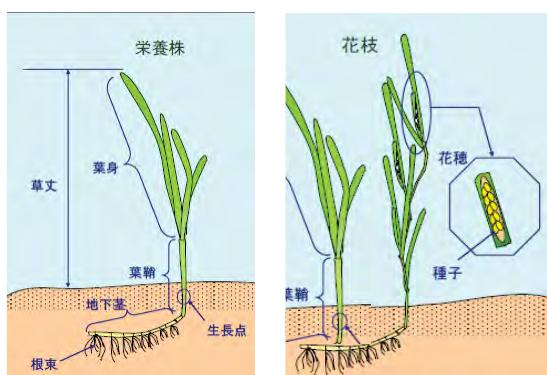


多年生の植生



一年生の植生

瀬戸内海のアマモ場の変遷の特徴：アマモの生活史の転換

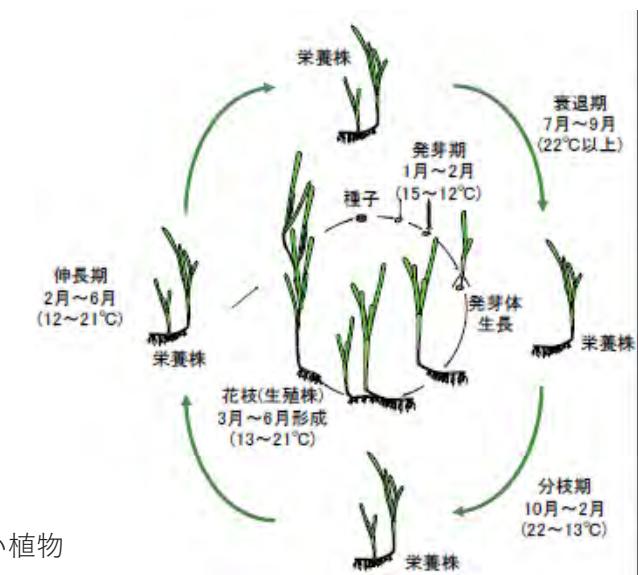


栄養繁殖 ⇒ 多年生

種子（有性）繁殖 ⇒ 一年生

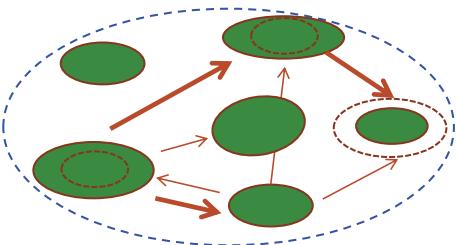
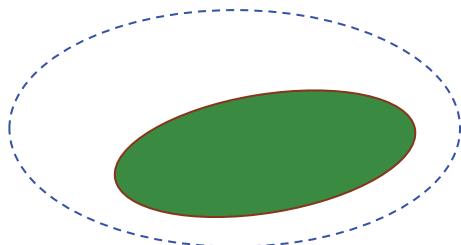
生活史や形態など、形質可塑性が大きい植物

特に瀬戸内海西部で一年生化が進む



水産庁「アマモ類の自然再生ガイドライン」より抜粋

瀬戸内海のアマモ場の特徴



多年生の大群落

生息環境が長期間安定するような場所
生育に適した栄養繁殖（クローン成長）

一年生/多年生混在の小群落の集合体

生息環境が頻繁に変動するような厳しい場所
有性生殖による色々な遺伝子型の混在

種子繁殖による分散と大きな年変動

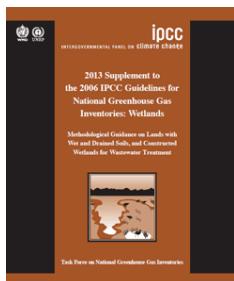
Contents

1. 瀬戸内海のアマモ場の変化

2. CO₂吸収源と水産業を両立させるアマモ場

3. アマモ場再生と今後の展開

アマモ場のCO₂貯留量：IPCC湿地ガイドラインより



IPCC湿地ガイドラインにおける算定式（トンC ha⁻¹ year⁻¹）

EQUATION 4.7
CO₂ EMISSIONS FROM REWETTING, REVEGETATION AND CREATION OF COASTAL WETLANDS

$$\text{CO}_{2\text{SO-RE}} = \sum_{V,S,C} (\text{A}_{\text{RE}} \cdot \text{EF}_{\text{RE}})_{V,S,C}$$

式4.7：湿地の再湿化、創造、植生の回復によるCO₂排出量

“CO₂ Emission = areas (A) × Annual Emission Factors (EF)”
 排出量 面積 吸收係数

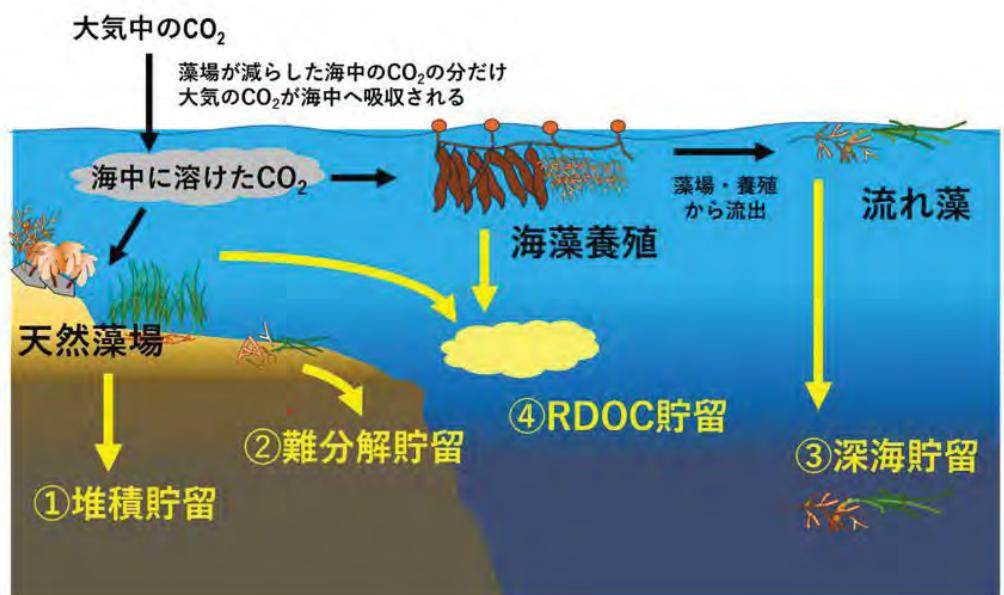
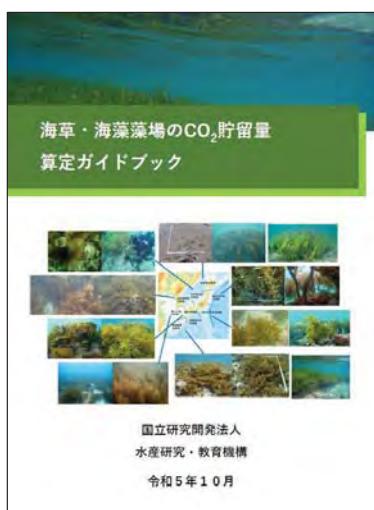
CO₂貯留量（トンCO₂/年） = 面積（活動量）× 吸收係数（トンCO₂/面積/年）

吸收係数 = CO₂隔離量（トンCO₂/面積/年）× 残存率

藻場の植物が有機炭素化した
大気中CO₂量（対象とする植
物の年間純一次生産量をCO₂
として算定した値）

藻場の植物によって隔離された
大気中CO₂のうち、分解されず
に海中に長期間貯留される割合

藻場のCO₂貯留プロセス



藻場のCO₂貯留プロセス

藻場タイプ j の吸収係数 (gCO₂/m²/year) = $\frac{CO_2\text{隔離量} \times \text{残存率の総和}}{\text{現存量} \times Ccont_j \times (44/12) \times E_j}$

$(P/B_{max})_j \times B_{max} \times r_{2j}$: 堆積貯留

+ $(P/B_{max})_j \times B_{max} \times r_{3j}$: 深海貯留

+ $(P/B_{max})_j \times B_{max} \times r_{1j} \times (1 - r_{2j} - r_{3j})$: 難分解貯留

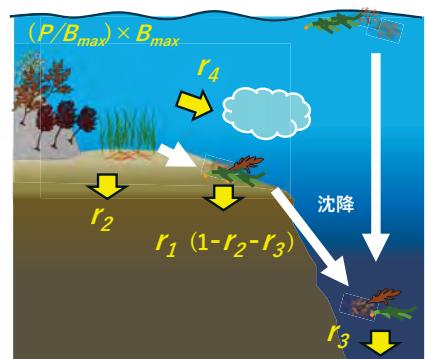
+ $B_{max} \times r_{4j}$: RDOC貯留

= $B_{max} \times \frac{[(P/B_{max})_j \times \{r_{1j} + (r_{2j} + r_{3j})(1 - r_{1j})\} + r_{4j}]}{CO_2\text{隔離量} \times \text{残存率の総和のうち、現存量以外の項}}$

※ 吸収ポテンシャル
対象とする海草・海藻が現存量1gあたりで貯留するCO₂量
(吸収係数は単位面積当たりで貯留するCO₂量)

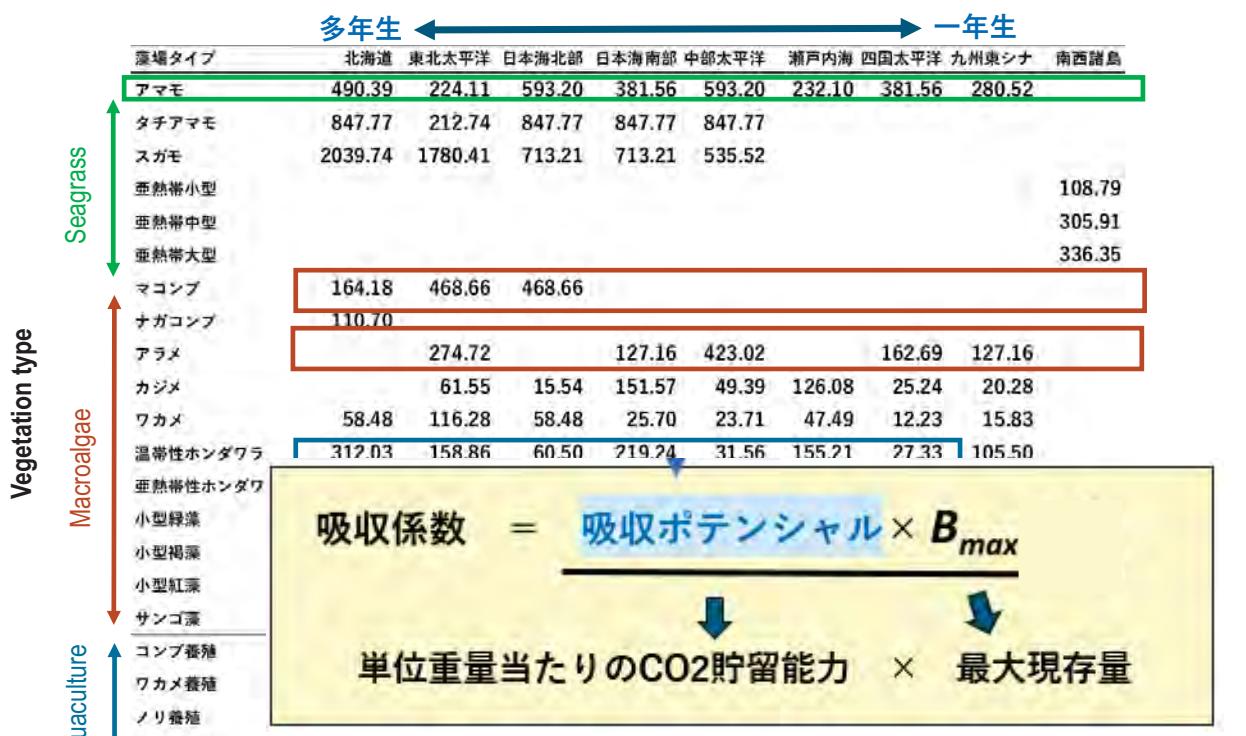
吸収係数 = $\frac{\text{吸収ポテンシャル} \times B_{max}}{\text{単位重量当たりのCO}_2\text{貯留能力} \times \text{最大現存量}}$



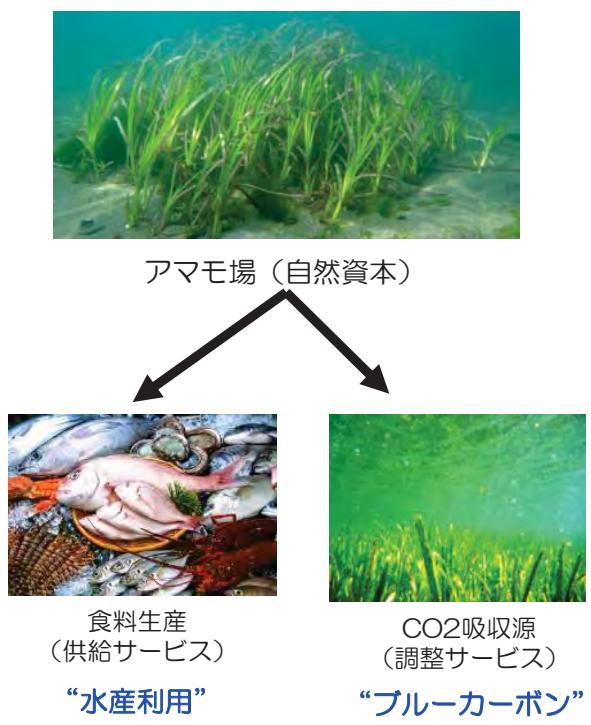
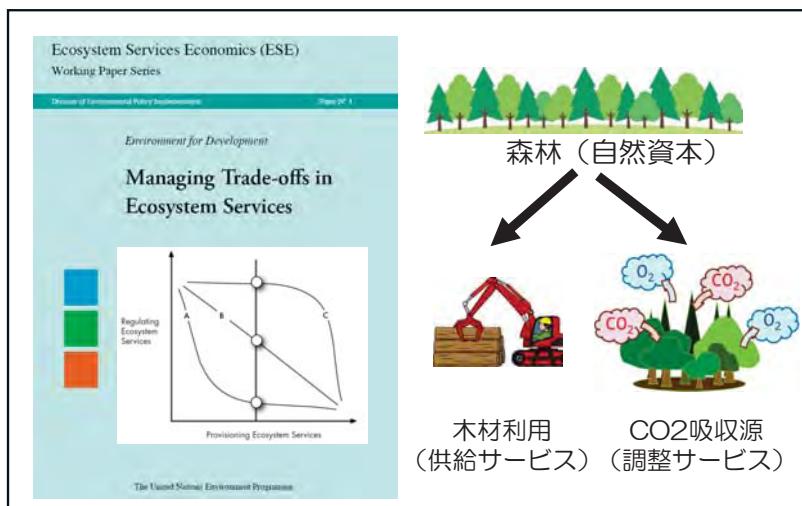


藻場タイプ・海域区分別の吸収ポテンシャル

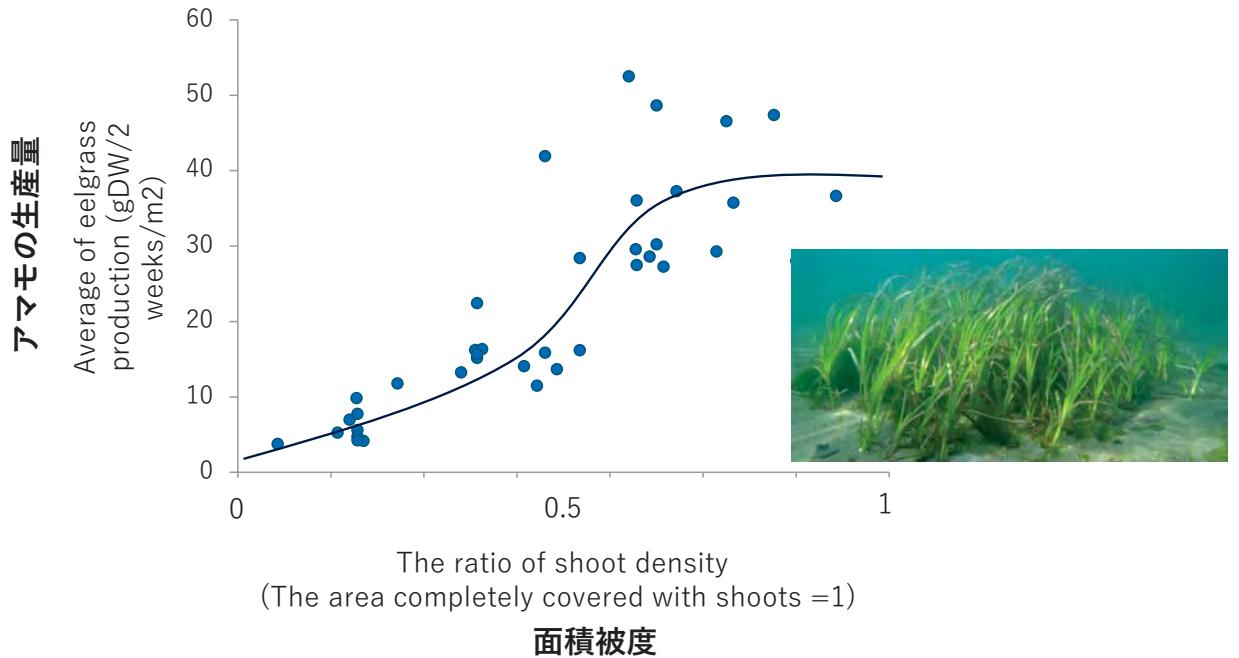
藻場タイプ・海域区別の吸収係数



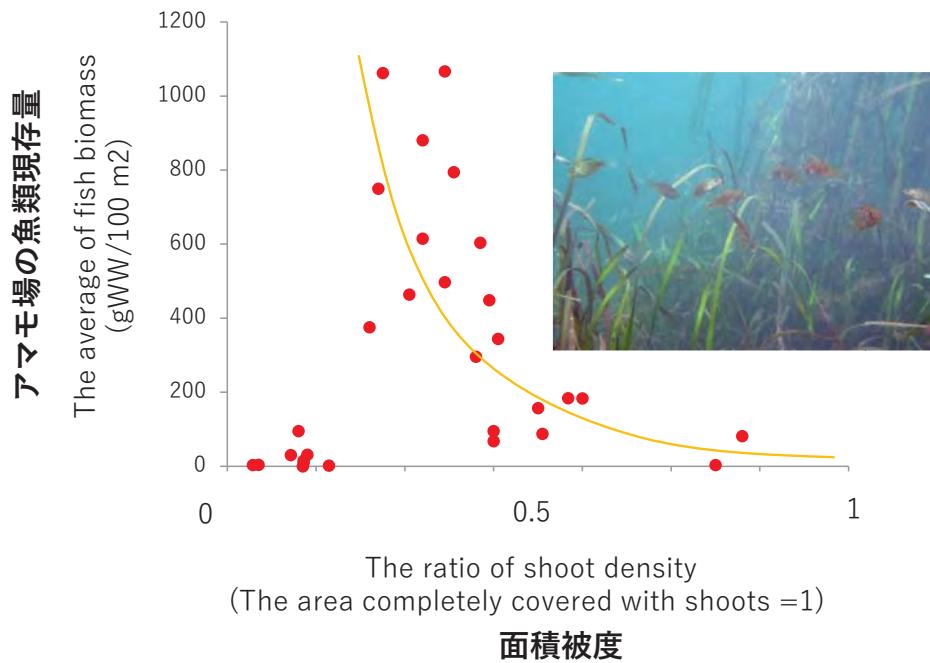
CO₂吸収と食料生産を両立させるアマモ場再生？



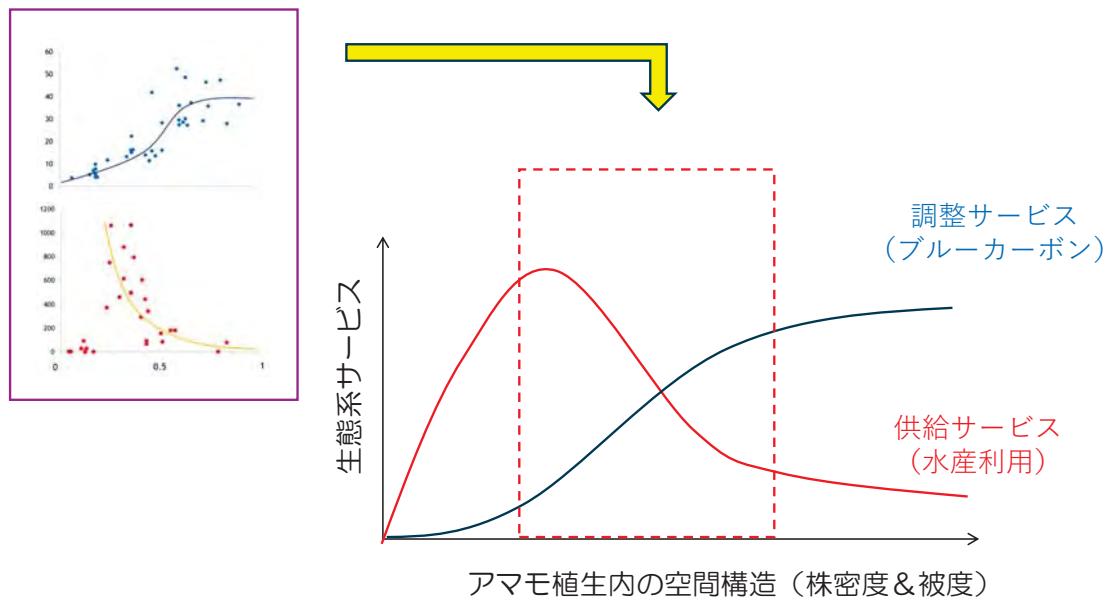
CO₂吸収と食料生産を両立させるアマモ場再生？



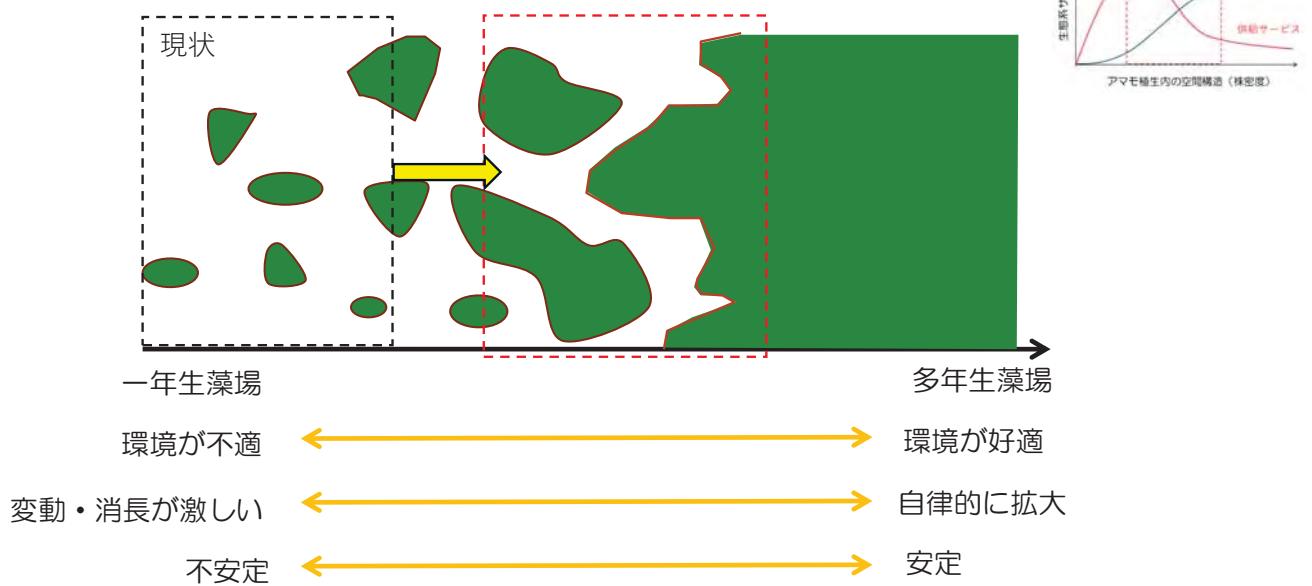
CO₂吸収と食料生産を両立させるアマモ場再生？



CO₂吸収と食料生産を両立させるアマモ場再生？



これからの藻場再生：CO₂吸収源と水産業を両立させるアマモ場



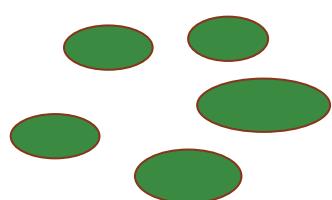
(Gaston 2003を改変)

Contents

1. 濑戸内海のアマモ場の変化
2. CO₂吸収源と水産業を両立させるアマモ場
3. アマモ場再生と今後の展開

これからの藻場再生

一年生アマモ場



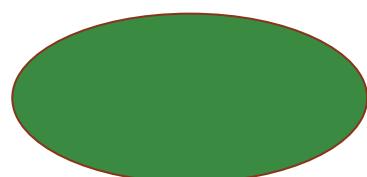
小群落の集合体

生息環境が頻繁に変動するような厳しい場所
有性生殖による色々な遺伝子型の混在

再生活動の方向性

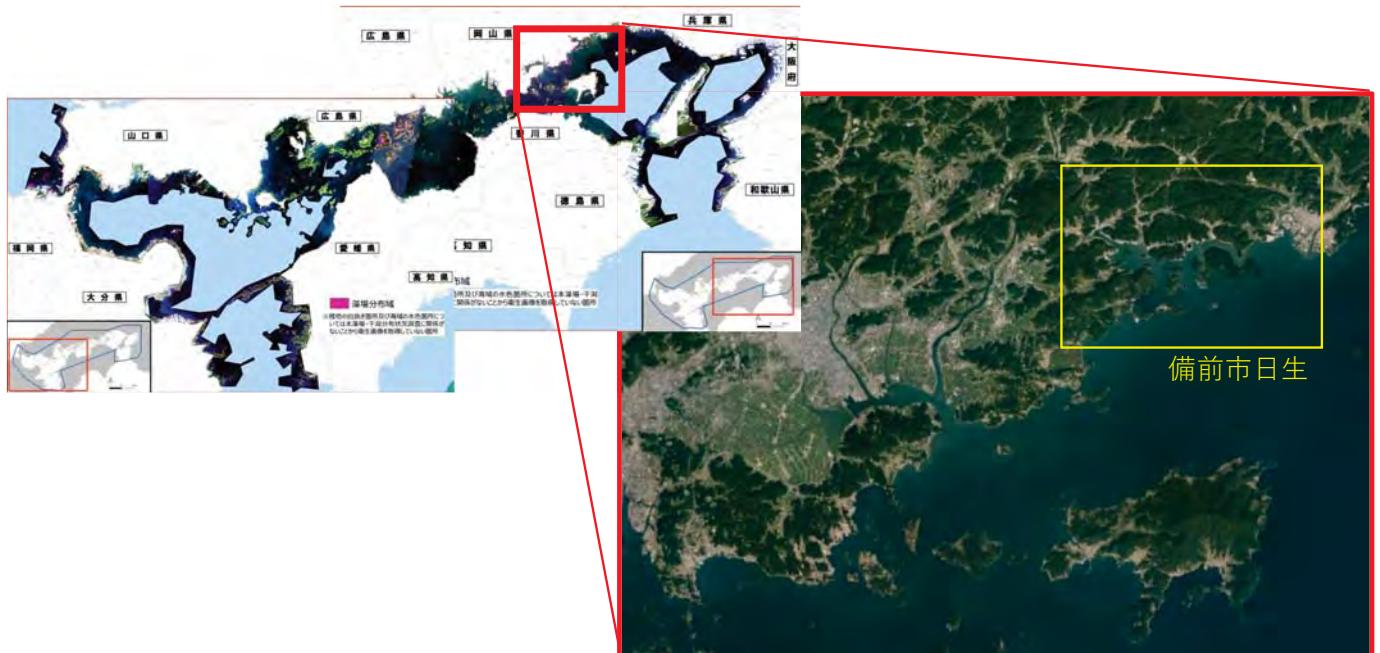


多年生アマモ場



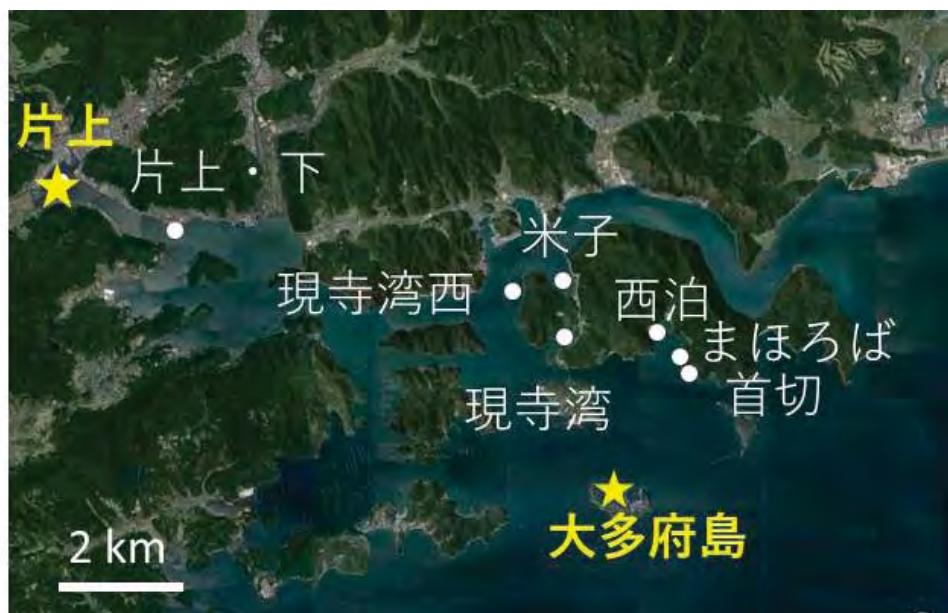
大群落

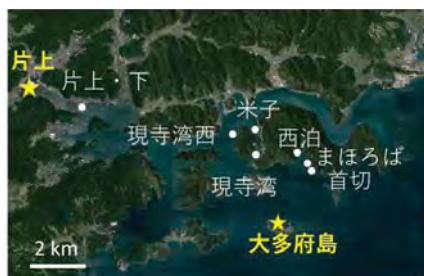
生息環境が長期間安定するような場所
生育に適したクローンが多数



藻場再生の過程を学ぶ

日生の9つの地区のアマモの遺伝子解析⇒アマモの移動分散・再生経路を把握





Clonal richnessが高い
⇒ 主に種子繁殖により集団が成立

集団	サンプル数	遺伝子型数	Clonal richness	アリル数	Allelic richness	ヘテロ接合度観察値 (Ho)	ヘテロ接合度期待値 (He)	近交係数
大多府島	42	41	0.98	6.50	5.535	0.473	0.516	0.117
西泊	38	31	0.81	9.17	7.564	0.548	0.562	0.006
まほろば	47	43	0.91	8.33	6.676	0.543	0.555	0.048
首切	21	20	0.95	6.33	6.274	0.550	0.541	-0.009
片上	37	36	0.97	9.67	7.864	0.593	0.592	0.012
片上・下	26	22	0.84	8.50	8.003	0.576	0.592	-0.006
現寺湾	48	45	0.94	9.17	6.707	0.556	0.551	-0.033
現寺湾西	37	29	0.78	8.67	7.408	0.563	0.552	-0.008
米子	49	45	0.92	10.00	7.185	0.559	0.561	-0.006
合計	345	312						

Clonal richness = 遺伝子型数／サンプル数

Hori and Sato 2021 を改変

アマモ播種実績の記録

Year	Source area of seeds	No. seeds ($\times 10^4$)	Areas seeded
1985	大多府島	15	楠戸、現寺湾
1986	大多府島	175	楠戸、現寺湾、米子湾、他2箇所
1987	大多府島	252	米子湾、曾島北、鴻島東
1988	大多府島	204	米子湾
1989	大多府島	220	楠戸、現寺湾、米子湾、千軒湾*
1990	大多府島	401	楠戸、現寺湾、米子湾、千軒湾*
1991	大多府島	342	楠戸、現寺湾、米子湾、千軒湾*
1992	大多府島	351	現寺湾、米子湾、千軒湾*
1993	大多府島	251	現寺湾、米子湾、千軒湾*
1994	大多府島	251	楠戸、現寺湾、米子湾、千軒湾*
1995	大多府島	229	楠戸、現寺湾、米子湾、千軒湾*
1996	現寺湾、片上浦	351	現寺湾、米子湾、千軒湾*、他1箇所
1997	現寺湾、片上浦	430	現寺湾、米子湾、他1箇所
1998	片上浦	300	米子湾、千軒湾*
1999	片上浦	300	米子湾、千軒湾*
2000	久々井浦	300	米子湾、千軒湾*
2001	片上浦	975	米子湾、千軒湾*
2002	大多府島	200	米子湾、千軒湾*
2003	大多府島	200	米子湾、千軒湾*
2004	大多府島	200	米子湾、千軒湾*
2005	大多府島	200	米子湾、千軒湾*
2006	大多府島	200	楠戸
2007	現寺湾	164	楠戸、森下前
2008	米子湾、現寺湾	260	楠戸、森下前、千軒湾(五輪)
2009	大浦、米子、大多府島	185	楠戸、森下前、千軒湾(五輪)
2010	現寺、米子、大多府島	595	ヨータイ前、千軒湾(五輪)
2011	穂の木、米子、大多府島	1170	千軒湾(奥泊西・東、西泊、首切)
2012	米子湾、現寺湾	600	千軒湾(奥泊西・東、西泊、五輪、首切)
2013	現寺湾	304	千軒湾(奥泊西・東、西泊、まほろば下、首切)
2014	Drifted flowering shoots	574	千軒湾(奥泊西・東、西泊、まほろば下、首切)
Total		10199	



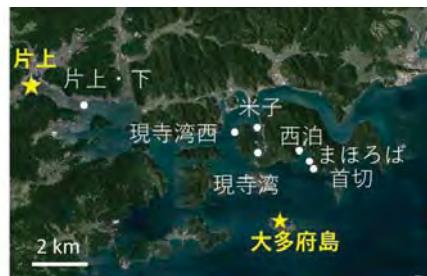
播種による種子交換頻度として利用

(岡山県水産課から提供)

Hori and Sato 2021 を改変

アマモ播種実績の記録

アマモ場間の遺伝的類似度に播種頻度が影響しているか解析で確かめる



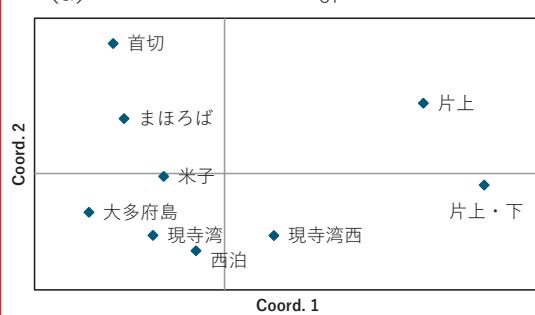
Otabujima	Nishidomari	Mahoroba	Kubikiri	Katakami	Katakami-shita	Genjiwan	Genjiwan-nishi	Yonago	
0.000									Otabujima
450.472	0.000								Nishidomari
320.472	0.000	0.000							Mahoroba
450.472	0.000	0.000	0.000						Kubikiri
0.000	279.214	279.214	279.214	0.000					Katakami
0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000				Katakami-shita
603.917	167.714	92.714	167.714	120.343	0.000	0.000			Genjiwan
0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000		Genjiwan-nishi
1284.417	205.000	0.000	205.000	907.843	0.000	120.343	0.000	0.000	Yonago

Hori and Sato 2021 を改変

日生の9集団間の遺伝的分化係数(FST)

大多府島	西泊	まほろば	首切	片上	片上・下	現寺湾	現寺湾西	米子	
	0.543	0.169	0.491	0.003	0.097	0.497	0.146	0.287	大多府島
0.007		0.169	0.410	0.087	0.317	0.553	0.848	0.429	西泊
0.009	0.009		0.522	0.015	0.031	0.040	0.112	0.309	まほろば
0.010	0.011	0.009		0.330	0.107	0.335	0.271	0.485	首切
0.014	0.011	0.011	0.011		0.875	0.013	0.287	0.033	片上
0.014	0.011	0.014	0.017	0.007		0.111	0.394	0.177	片上・下
0.006	0.006	0.009	0.010	0.011	0.012		0.582	0.581	現寺湾
0.011	0.006	0.010	0.012	0.009	0.011	0.007		0.223	現寺湾西
0.007	0.007	0.006	0.009	0.010	0.011	0.005	0.009		米子

(a) 遺伝的分化係数 (F_{ST}) による主成分図



(b) 播種の履歴 (1985-2014年)



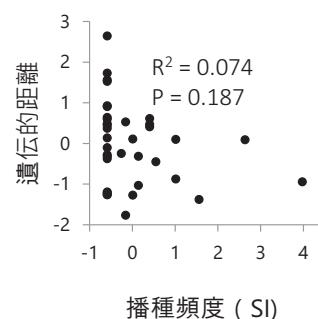
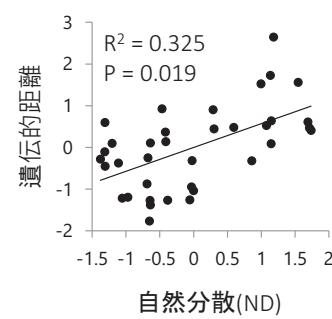
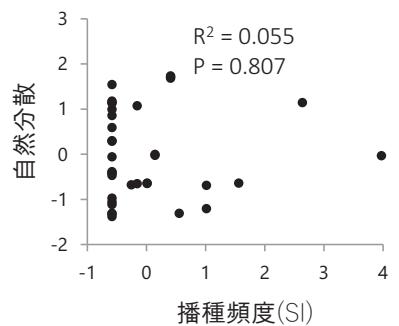
Hori and Sato 2021 を改変

解析結果：アマモの遺伝的距離の説明要因

播種頻度と比較するために、自然分散（実行距離）を計算

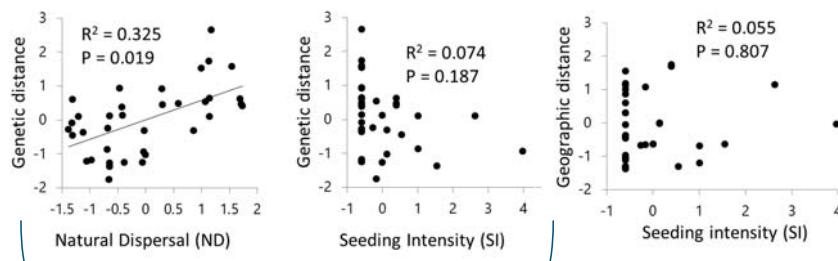
すべての変数は標準化

The data set was analyzed using Mantel's multiple regression matrix with randomization



Hori and Sato 2021 を改変

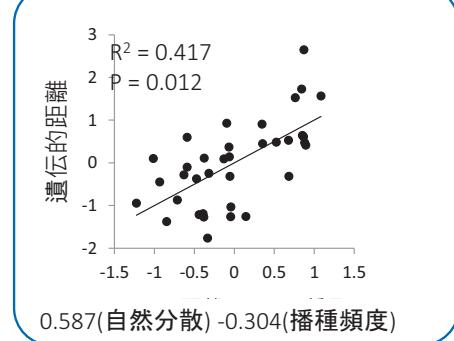
解析結果：アマモの遺伝的距離の説明要因



ベストモデルとして選択されたのは



集団間の自然分散を播種活動が後押しして分散を早めるする形



Hori and Sato 2021 を改変

DNA解析が示唆するもの

アマモ場植生の遺伝構造から、植生の再生には種子の移動分散が重要

+ 漁業者による播種活動は自然分散による集団間の遺伝的距離を有意に短くした



”播種活動は自然分散による遺伝構造を攪乱せず“

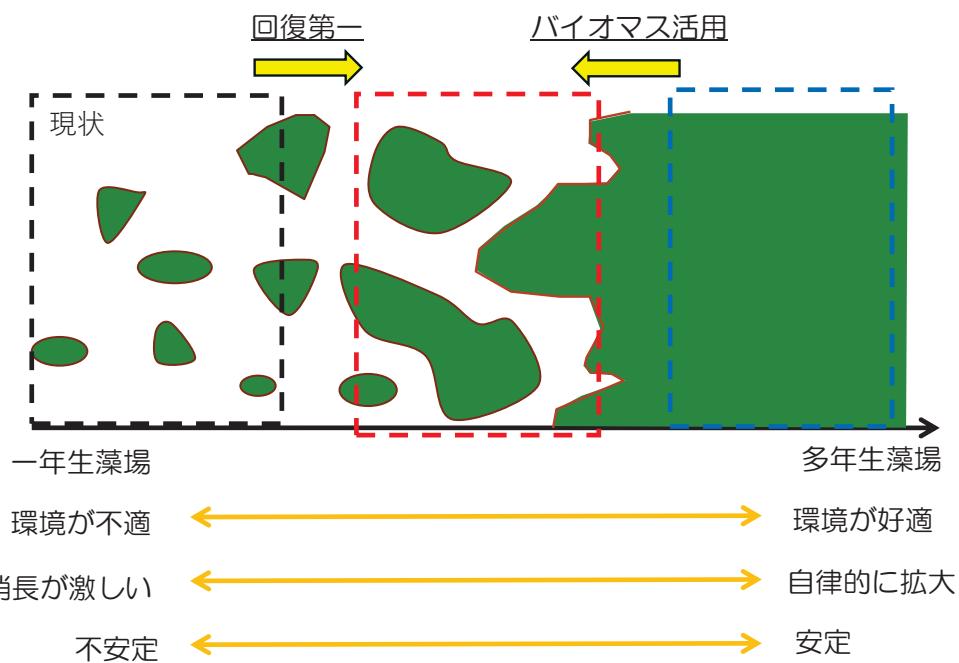
“自然分散のお手伝い”をした

⇒ 人工的なアマモ場を作ったのではなく、自然回復を促進させた

→ 分布面積の拡大へ

自然再生の理想的な事例

今後の展開：これからの藻場再生



肥料としての利用

(江戸～昭和30年ごろ)

・神奈川県三浦半島

入会権を設定して海藻と海草を堆肥として利用

・愛知県三河湾

春の大潮に一斉に刈取りし、塩分を除去してから堆肥にしたり、焼いた灰を肥料として販売

・広島県大崎上島町

夏の大潮に一斉に刈取りし、その後一年かけて堆肥に。ネギ、麦、イチジクに利用。サツマイモ、ジャガイモにはガラモ肥料を利用

・静岡県浜名湖

漁業よりもアマモ採りが重視され、浜名湖全体を区割りして集落ごとに採草権を設定

・島根県中海

アマモ肥料によって綿花栽培が可能になり、特産品に。アマモ肥料専業者が存在するほど大規模で、年間10万トンを施肥



これからの使用 ⇒ バイオマス活用へ

これからの藻場再生：東京湾 盤洲干潟（千葉県木更津市）



増えたアマモ場を間引き管理



CO₂吸収源の構築
+バイオマス活用



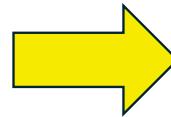
- ・新木更津市漁業協同組合
- ・千葉県水産総合研究センター
- ・水産研究・教育機構
- ・リンテック株式会社



これからの藻場再生：海草のバイオマス活用の始まり



LINTEC
Linking your dreams



海草混抄紙へ



引用元：三洋テクノマリンHP
(<https://www.stm.co.jp/cms/stm/sp/images/news/jblue2023.png>)



アマモ場（コアマモ）で増えたアサリ



まとめ：藻場再生/ブルーカーボンで3つの社会問題解決に

